

「家がいいね」 第6号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2004.11.10

「こ」しばらく、感じるままのメモ書きや報告の形です。

天災はあっても、秋は深まり、「紅葉」あるいは「黄葉」が鮮やかさを増す時期です。春のような華やかさは無いもの、なぜか写真のような情景は心をとらえて放しません。



紅葉が表す心象風景

紅葉は、落葉樹の葉が木を離れ落ちる前に、水分や養分を絶たれ変色する過程であり、いわば死にゆく姿なのになぜ見惚れてしまうのでしょうか。単に落ちる、あるいは枯れるというのではなく、葉の春夏の成果をこの美しさまでに昇華する過程に、人生の成就もこうありたいと連想するところが背景にありそうです。

最後の一片

オー・ヘンリーの短編小説で有名な題です。お話は、抗生物質も無かった時代、流行肺炎で死の床に臥す若い女性画家が、窓から見えるツタの残りの葉に自分の行く末を託していました。友達の励ましもむなしく、最後の数葉を迎えて嵐の夜になります。しかし次の朝、一片は残っていました。どうせ明日は、と思いつつながら残り続ける葉を見て、女性は励ましに応える気持ちになります。快方に向かった時、知るのでした。同じ画家下宿の階下に住む、長年ウダツの上がらない老画家が肺炎で死んだことを。一片は、嵐の夜、全ての葉が散る前に氷雨の中、彼が灯りを頼りに壁に書き込んだ葉だったのです。老人の最後での傑作と、その死を代償に引き継がれる「いのち」の物語と言えます。「葉っぱのフレディ」もまたいつか紹介します。

「いい加減に生きる」

飛騨高山で、病院の心理ボランティアを勤めながら、仏教の果たす役割を考え続けている、大下大円さんの講演を聞きに岐阜まで行きました。私は、機会は自分から求めて会う事で、更に実り多いものになると感じました。葬儀の段階だけの仏教ではなく、病む場所に出かけてゆく姿勢が、もっと近くの病院でも見られるような時代になって欲しいと思います。

一つのことに関われない、そんな「がんばらない」考え方も必要と思いい、この本を紹介します。発行は講談社。



「今に生きる」講演会のご紹介

以前の勤務先で、私自身が「うつ」に深く沈んで休職していた時の主治医の、小川幹夫医師が、伊勢での講演会をお世話されます。大事なテーマの問題を、西洋の精神医学と日本の療養法（森田療法と内観療法）を結んでお話しけるとの事です。

日時 11月28日(日) 午後2〜4時
場所 伊勢市佐八(そうち) 町

講師 ウェルサンピア伊勢(旧 年金保養C)
D・K・レイノルズ博士(文化人類学者)

不安にあおられ、自分にも自信を失い、相手へ不信をぶつける世の中です。NOばかりではなく、YESと言える「建設的な生き方」は、心療内科医として、一度聴いて見たいと思います。この講演会の資料は、クリニックにあります。



いせ在宅医療クリニック
自宅での人生を
最期まで支援します
〒516-0805
三重県度会郡御園村高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
HP <http://tcp-ip.or.jp/~takuro>